
それとは別に

描述 氷菓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それとは別に

【Zマーク】

N4432P

【作者名】

描迷 氷菓

【あらすじ】

「ハーフのは仕事気があるくらいの気持ち悪くなるものだから。

今の私なら誰とでもキスができる気がした。それと同じ、誰とでも性行為を行える気もした。きっと食っているのだ。と思っている。それには自分でも大いに納得できた。

富野くんは私が始めて、身体を重ねた相手だ。彼とは3年ぐらいいの付き合いになる。一時、別れたときもあった。けど、そんなことは今ではいい思い出にしかすぎなくて、あのときの苦痛や不安や思いは心に傷として残っているはずなのに跡形もなく綺麗に完治してしまった。

富野くんのこと今は今でも好きだし、歯止めが利かないほど愛している。

彼と別れていた一時に、今村くんに『襲われた』。私は彼のことが好きではなかった。でも、私は彼を頼っていた。富野くんと離れた寂しさから私は逃げて逃げて、彼に逃げ込んだ。

今村くんの手は慣れていた。私が暴れるとそれを綺麗にふさいだ。それでも私は手と足をバタバタと暴れさせていた。とうとう彼は、紐を取り出して（紐からは分からない）私の両手首をきつく結んだ。彼の部屋は真っ暗で、目が暗さに慣れるのに少し時間がかかった。今村くんは私の身体が用当てだったから、唇は合わせることなかつた。私は心の隅で彼を許していた。もう、いいや。と思つた。抵抗もできない私はただの玩具だった。

彼は無造作に胸を揉んだり、舐めたり、時には私に感じさせた。彼は私を求める続けた。私の身体を求めて求めて求めて求め続けた。私は求めることができなかつた。求めることもしたくなかった。

けど、私の身体はすっかりと感じてしまつていて、もっともっとと求めていた。脳味噌では、富野くんに謝り続けていた。嫌で嫌で嫌でしようがなかつた。

彼の手は華麗に動いていた。丁寧に服を脱がせ、ブラのホックをは

ずしたし、1分ほど放置もされた。今村くんは放置プレイが好きなのかもしれない。

「ねえ、何で泣いてるの？」と彼が聞いていた。

「やめてよ」私はその返答にならないことを返した。声も小さくしか出なかつた。

その後すぐに彼の手は私の太腿の付け根を触つた。私の身体はビクツと強張つて、大きく息を吐いた。

私の身体は私の脳とは別に生きている生き物のようだつた。脳の私は彼を拒絶していた。身体の私は彼を受け入れていた。本当はどうちらも私なのに、別のもののような気がした。

喘ぎたくないのに、喘いでしまつた。

濡れたくないのに、濡れてしまつた。

もう、身体だけが狂つていくのが分かつた。脳だけが状況を理解して、整理して、私に認識させた。しかし、逆にその脳の冷静さが私に現実を突きつけて涙腺を緩ませた。

私の服を元に着させ、手の紐も取つた彼は「ごめんね」と呟いた。私は、ベッドの上で呼吸を見失い、身を縮めていた。

ごめんね。というぐらいなら私はなにもしてほしくなかつた。けど、私にはそんなこと言える権利がなかつた。私も一度は心の隅であるがどこであろうが、彼のことを許してしまつたわけなのだから、今更、彼に怒ることもできなかつた。

復縁する前にこのことを富野くんに話した。全ていい訳にしかならなかつたが、「嫌だつたこと」「辛かつたこと」「今でもあなたが好きなこと」そのようなことを全て話した。涙が止まらなかつたし、吐き気もした。彼の顔は見ていない。見ようとしても涙で見れなかつただろう。

きっと、富野くんは驚いただろうし、ショックを受けただろうし、私との信頼を崩したかもしれない。

けど、彼は顔がぐしゃぐしゃでびしょびしょな私を抱きしめた。彼

と付き合つてから、抱きしめられて一番優しい感じだつた。

私は訳も分からず、ずっとずつと謝り続けていた。彼は私が「ごめんなさい」と口にする度に強くぎゅっと抱き締めた。

「もう、言わなくていいから。大丈夫だから」

やつぱり彼が好きだとそのとき私は思った。

心から安心できた。

捨てられていないと思った。

私はこの人を求めていたんだ。

身体も脳味噌も富野くんを求めて求めて求めて求めていた。

「ごめんなさい」最後に言つと、きつい束縛が解かれた。私はふにやつとなつて、10cmほど背の高い彼を見上げた。

「もう、いいんだよ」

彼は呟いたのであった。

私は少し、傷ついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4432p/>

それとは別に

2010年12月12日03時13分発行